



ごあいさつ

東北学院大学博物館は、二〇〇九年の開館から十年が経過しました。その間、東日本大震災を経験し、文化財レスキューにも従事することで館としての活動も地域に展開していきました。大学博物館の重要な活動に、学部生の学芸員資格課程の実習の場としての活動と、大学院生を学芸研究員として雇用しての展示作成・展示解説・資料整理などの実務経験の場としての活動が挙げられます。こうした教育活動によって、学芸員としての経験と実績を積んだ学生・大学院生から、毎年一、二名の博物館学芸員、文化財担当職員等を輩出しています。

本号で五冊目となる『コレミテ』は、当館の収蔵品の解説書です。いわゆる収蔵品図録は、一般的には資料そのものの情報と資料写真で構成される淡白なものですが、本書の意図するところは「読んで楽しい収蔵品図録」、そして「学生の視点で作る収蔵品の解説書」です。

毎年一冊ずつ刊行している館蔵品図録『コレミテ』

ですが、今回は近世の仙台城下の風俗を伝える『仙台年中行事絵巻』です。とは言っても本資料は、それを近代の蔵書家で郷土史家の常盤雄五郎氏が、みずから所蔵する資料の複製版として昭和十五年に出版したものです。資料としては二次資料ではありますが、この複製事業そのものが戦前の仙台における郷土史の動向や資料保存のための篤志家の活動を伝える貴重な資料です。常盤氏は、当時の著名な郷土史家である三原良吉氏に依頼して作成した本資料の一場面ごとの解説も補助資料として作成しました。この資料を、大学院生たちが協力してまとめ上げたのが今回の『コレミテ』です。常盤雄五郎氏の視点と、現代の大学院生たちの視点で掘り下げた『仙台年中行事絵巻』を、絵引きの形式で楽しんでいただけるように企画・編集を行いました。ぜひ、楽しんでいただきたいと思います。

東北学院大学博物館

コレミテができるまで

東北学院大学博物館収蔵資料目録である『コレミテ』は、博物館に勤務する大学院生（学芸研究員）が作成しています。ここでは、その作成の様子を少しだけご紹介します。



① アイディア出し

どの資料をピックアップするのかが決定します。その後、選んだ資料がどのようなものなのか、学芸研究員が調査します。

② たがやすー!

さらに、資料のどの点がおもしろいのか、どのように見せたら伝わるのかなど、学芸研究員の視点で、資料のおもしろさを「たがやして」いきます。

③ 編集

担当のデザイン業者さんと打ち合わせし、全体的なデザイン等を決定していきます。



タイトル文字は本物のクッキー!

仙台年中行事絵巻

見どころ

『仙台年中行事絵巻』は、城下の侍や庶民の日常生活、風俗などを描いたものである。描かれた年代は嘉永三年（一八五〇）前後と考えられている。「年中行事」とされてはいるが、月々の行事を取り上げているわけではない。また、昭和十五年（一九四〇）に『仙台年中行事絵巻』の名称で復刻・出版されている。

仙台年中行事絵巻は江戸時代の人々の暮らしが垣間見える。全体を眺めても彼らの賑やかな声が聞こえてきそうな絵であるが、さらによく見てみると一人ひとりの表情や行動がコミカルに表現されているのがわかる。様々なことをしている人々の様子をよく観察するとおもしろいものが見えてくる。

『仙台年中行事絵巻』復刻版 昭和十五年（一九四〇）刊
寸法 二九〇×四五五（センチメートル）
紙質 柳生和紙

もくじ

- 1、正月習俗之図
- 2、凧揚げ附野懸け之図
- 3、白山祭附雛祭之図
- 4、仙台城大手門大橋附近之図
- 5、大回向之図
- 6、懺見附天神講之図
- 7、藩主狼烟御覽附水練御覽之図
- 8、東照宮祭礼之図 其一
- 9、東照宮祭礼之図 其二
- 10、東照宮祭礼之図 其三
- 11、東照宮祭礼之図 其四
- 12、養賢堂附医学館之図

実は未完成？

仙台年中行事絵巻

「5、大回向之図」の左側は何も描かれていない空白がある。
図の注記をするための枠組みの中に何も書かれていない箇所がいくつかみられる。

では、
赤らうか。



1、正月風俗之図

思い思いの形で正月を満喫する仙台の人々と
行事を楽しむ子どもたち



【解説】

この絵は正月に仙台で行われるさまざまな芸能や子どもの雪遊びの様子を描いたものである。

中央には松焚祭に伴い行われる「裸参り」が描かれている。明治以降は「どんと祭」とも呼ばれるようになる。また、右側には芸能を行う人々が描かれている。大黒の姿をして造り物の馬を腰につけて踊る「馬乗田植」や早乙女や弥十郎、岡の衆など数人で行われる「大田植」、黒い頭巾をかぶり面をつけている「米搗田植」などが描かれている。一方で、「稲荷」という狐らしき格好をした人もみられる。絵の左側には実が熟すように「成木責め」を行う子どもや雪だるまを作る子どもたちが描かれる。

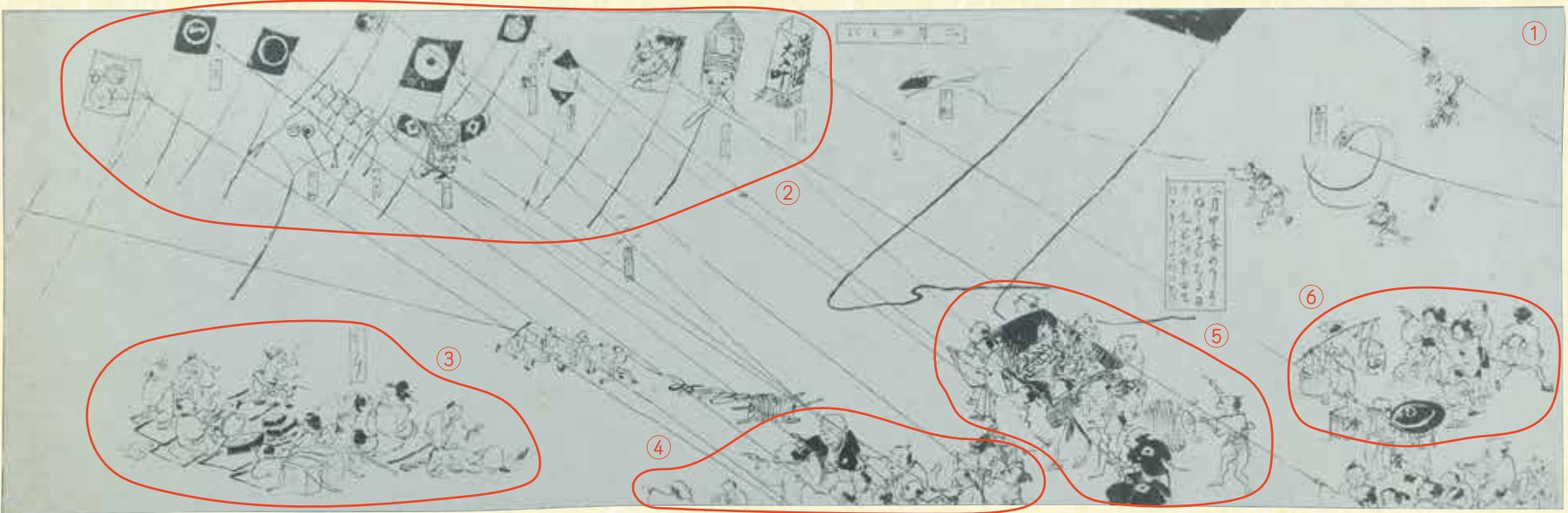
正月を楽しむ人々の賑やかな声が今にも聞こえてきそうな絵である。

【絵引き】

- ① 裸参り
腰に注連縄を巻いた男性が参詣に行く。とても寒そう。
- ② 稲荷
狐のコスプレ。クオリティが高い。
- ③ 大田植
弥十郎が率いるのは唄と囃子担当の早乙女と岡の衆。
- ④ 海鼠曳き(なまこひき)
子どもたちが海鼠をひいて家の庭を巡る。「なまこどのの御通りよ」
- ⑤ 成木責め
「なるかならぬか」「なり申すなり申す」と子どもたちの声が聞こえてきそう。
- ⑥ 雪遊び
可愛らしい雪だるまを作っている。

2、凧揚げ耐野懸け之図

野に出でて 駆けける者らの かけ声は
吹けよ春風 揚れよ天狗旗



【解説】

旧暦の二月末から、のどかな日が続くようになる。仙台にも待望の春が近づいてきたのである。この時期、仙台城下の人々は家族を連れて、宮城野原などの郊外へ出かけた。弁当や敷物などを持ち寄り、宴会や凧揚げをするためだ。

仙台ではかつて、凧を天狗旗(てんばた)と呼んでいた。種々の天狗旗が次々と空へ揚がっていく。その下には、大いに盛り上がる酒宴の側で、退屈そうに待つ犬と、酔い潰れる男性。凧を上手く揚げ、主人の子息の前に、したり顔の若い奉公人。当時に生きた人々の等身大の姿がコミカルに、しかし生き生きと、鮮明に描かれている。これら一連の行事が野懸けである。

【絵引き】

- ①野懸け
春先の野懸けは、仙台郊外、特に伊勢堂山(青葉区荒巻神明町)や宮城野原(宮城野区宮城野)などで行われたようである。
- ②天狗旗
四角い形の角凧、干しエイを模したからかい凧など、形状・図案ともに多様である。「蒲焼 大入叶」とある行灯凧は、商店の宣伝を兼ねたものかもしれない。
- ③酒宴をする男女
三味線を弾く女性や、太鼓を叩く男性、歌舞を披露する者も。盛況の主人らの側には、退屈そうな犬。泥酔した男性と、それを介抱する男性もみえる。
- ④凧揚げをする二団 その一
商家の主人と奉公人の一団だろうか。右端には、主人の子息の手前、さも得意気に振る舞う若い奉公人の姿がある。
- ⑤凧揚げをする二団 その二
大の大人が数人がかりで運び、様子から、その大きさと重さがうかがえる。図案は歌舞伎の演目の一場面だろうか、勇猛な武将が描かれている。
- ⑥場所取りに取りかかる男女
家族であるうか、幼い子ども姿も確認できる。皆が揚がった凧に夢中になつて傍では、立ち小便をする女性も。

3、白山祭附雛祭之図

良い一年にするために、がんばれ町の若人！
どれ、高みの見物だ。



【解説】

仙台市若林区木ノ下に所在する白山神社は、隣接する陸奥国分寺よりも昔からあったとされるが、文治五年（一一八九）の奥州合戦の兵火で焼け再建されている。

白山祭は、別名「ぼんぼこ祭」といい、三月三日に行われる。流鏝馬、的ばやい等の神事と出店や見世物小屋が並ぶ大変賑やかな行事。出店では瓢箪のついた火伏のご利益がある「ぼんぼこ槍」が売られ、見世物小屋には首の長い妖怪の姿がある。見世物は毎年変わり、ある年にはラクダの絵が飾られたことが「ぼんぼこ祭図」に描かれている。また、この日は卵を家や店に入れることを禁止しており、破ると家が火事になるらしい…。

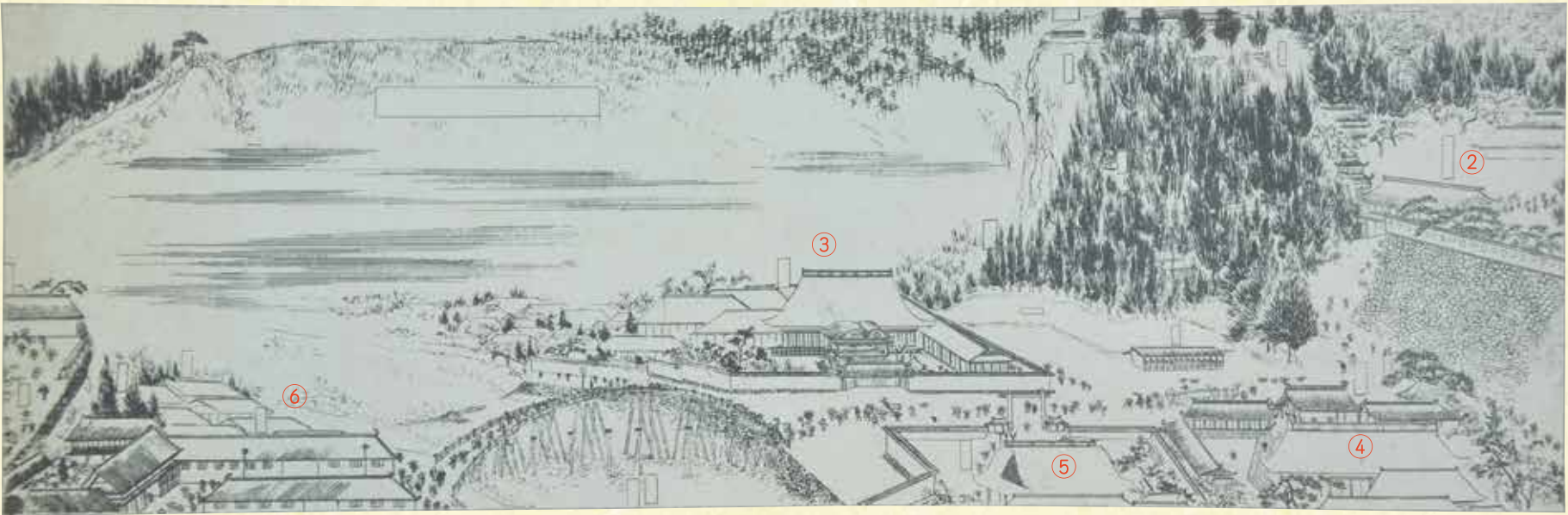
雛祭は、神酒徳利に家紋がみられることから大家での様子が描かれていると考えられる。

【絵引き】

- ①白山社
白山祭は、今年も賑わっているね。鳥居のところで待ち合わせしよう。
- ②出店
ぼんぼこ槍はここで売っているかな？せっかくだから買ってこよう。
- ③流鏝馬
太鼓楼に登れば流鏝馬がよく見えるかな？
- ④見世物小屋
今年は妖怪ですね。すごく迫力あるな。
- ⑤的ばやい
的ばやいは、長町と原町の若者たちが流鏝馬（やぶさめ）の的を奪い合い、豊作を占う行事。長町は白、原町は赤のふんどしを締めていざ出陣！
- ⑥家紋
大きな家での雛祭の様子だね。華やかで、みんな楽しそう。

4、仙台城大手門大橋附近之図

江戸時代の仙台城と 武家屋敷を覗いてみよう！



【解説】

仙台城下の平面図は、正保二年（六四五）に幕府に提出した絵図など複数あるが、俯瞰した城や町並みを描いた詳細なものは城という性格上も少ない。

この絵図は、城の平面図が立体化され、城や武家屋敷の門や建物、参勤交代とそれを見る人々など、文献史料以外に写実的に当時の様子を知ることのできるものとして興味深い。

なお重臣邸宅の検討から時期は江戸時代の後期と考えられ、参勤を終えて仙台に下向してきたときの様子を描いたものとされている。

【絵引き】

① 本丸

本丸には大広間や懸造が建てられる。特に左端に描かれた懸造は、本来崖から突き出すようにして造られたらしい。

② 二の丸・大手門

二の丸では藩主が生活したり藩の政治が行われたりした。城下町から大手門を通ると二の丸に行き着く。

③ 片倉家屋敷

片倉小十郎は伊達家を支える重臣の一人で、白石に所領をもつ。

④ 登米伊達家屋敷

登米を所領とする伊達家の重臣。屋敷の場所は現在の仙台国際センター。

⑤ 水沢伊達家屋敷

胆沢郡水沢（現在の岩手県奥州市）を治めた。③④⑤の屋敷地は延宝年間（六七三〜一六八一）に確定した。

⑥ 紙葺・肴蔵・吹抜門

大橋を渡った対岸には、紙葺・肴蔵といった藩の建物があり、城下町へと続いていく。

5、大回向之図

願行寺にて大回向開催！
その様子を少し覗いてみよう！



【解説】

大回向（おおえこう）は四月十三日から十五日に行われていたとされる。北六番丁万日堂、天神下願行寺、東八番丁常念寺の輪番で行われた。この図は、願行寺の大回向を描いたもの。その他の寺院でもこれを行おうとしたが、藩でこの三つの寺に限定したとされている。

一説には天和元年（一六八二）から始まったとされる大回向。この日は、先に死んだ者の魂がこの寺に集まるとされ、各家の人々が参詣に訪れる。参詣者たちは、前もって配られた袋に施行米を入れて持ってきて、喜捨する習慣になっている。門の前にはたくさん物乞いが集まっており、参詣者は彼らに米や銭を施した。境内には善男善女が多く集まり、いつになく賑わっている。

【絵引き】

- ①物乞いと施しをする人々
物乞いたちの中には遠くから来た人や寺の前に小屋を構える人もいた。
- ②露店
境内には多くの露店が出ている。一番奥に出ているのは「覗きからくり」の露店。
- ③縁の綱
仏の指に結ばれた綱。参詣者たちが手を伸ばしているのがわかる。
- ④露店（？）
子どもたちが集まっているようだが、これも露店だろうか。
- ⑤庫裡（くり）
庫裡は寺内の食事を準備する所、あるいは住職やその家族が住む建物のこと。その屋根ではカラスが羽休めしている。

左には、何も描かれておらず、おらぬようだな。



担当：佐藤佳永

子どもたちよ、健やかなれ。
 我が子思ふ、親のこころと夏の空



【解説】

五月五日は「こどもの日」、端午の節句である。家々には、家紋や武者、鍾馗様などを描いた幟旗が立ち並び、鯉のぼりが悠々と空を泳ぐ。その様子は非常に勇ましく、市中をめぐるだけでも相当のインパクトがあっただろう。幟旗は、七〜九メートルの長さをもつ。男児が生まれて五歳の春を迎えるときに調達するのが通例だが、古い幟ほど良いという考え方が家々にはあったようだ。鯉のぼりは一家に一匹、リアルなものを飾っている。さらに邪気払いの菖蒲に柏餅といった、今にも通ずる習わしがこの当時から行われていた。

六月二十五日には、榴岡天満宮で「天神講」が開かれる。子どもの成長と学業成就を願う行事である。私塾に通う子どもたち（筆子）が、師匠とともに天神社へ朝早くから参詣する。その中でも、優秀な子が手本に倣い、筆で大文字を書き、それを天神社へ奉納するという習わしもあった。子どもたちの中で日傘をかぶっているのは女兒である。男児と比べて少ないが、この時代、女兒も手習いを受けていた。

【絵引き】

- ① 幟旗
 家紋・武者・鍾馗様が描かれている。上部に小さな吹き流しのようなものがたなびく。
- ② 鯉のぼり
 一匹のみ飾られている。現在の鯉のぼりは家族のイメージだが、江戸時代は違うのがわかる。
- ③ 榴岡天満宮
 伊達綱宗の時代に現在の仙台市宮城野区榴ヶ岡に建てられた。菅原道真の直筆の書が奉納されているという。
- ④ 師匠と筆子
 朝早くから天神社へお参り。今年は誰が大文字を書いて奉納したのだろう…。
- ⑤ 女兒の筆子
 日傘をつけている。女子教育は江戸時代でもしっかり行われていた。読み書きは必須のスキルだったのだろう。
- ⑥ 梅林亭
 現在の「丘のホテル」。江戸時代から料亭・旅館として人々に親しまれてきた。

藩の行事はお堅いもの？
否、皆で遊び、皆が楽しむものである！



【解説】

仙台藩には、藩主が仲秋に狼烟を見る行事、夏に藩士の水練の様子を見る行事がある。藩主は幔幕や竹矢来て囲われたVIPルームで狼烟や水練を見ている。狼烟の行事は台原で行われる。見世物小屋や露店が会場の周りに立ち並び、見物客は立ち入り禁止の柵でキープアウト。会場中央で筒を立てる砲術稼業の人々が藩主に狼烟を披露するのだ。彼らが打ち上げる狼烟は音を鳴らすものである。昼夜でその種類が違い、雷鳴が轟くほどの爆音。狼烟の中には短冊や散らし紙、風船等のおもちゃがぎっしり。そんな中、打ち上げられたおもちゃを拾おうと、警護の制止をかくぐった悪ガキたちが…。藩主や警護なんて目じゃない。そこにおもちゃがあるから走るのだ。

水練とは泳ぎの武芸である。場所は広瀬川の賢淵から三居沢のあたりで行われた。上流では仰向け泳ぎ・飛び込み。下流では撒かれた瓜を泳ぎながら食べる。曲泳を披露する姿は、さながらアーティスティックスイミング。

【絵引き】

- ① 砲術の専門家たち
会場中央で何やら筒を立てる大人たち。今年も大成功！
- ② あふれんばかりの観客
普段見られない行事を前に、大勢の観客が殺到。さらに出店や見世物小屋が立ち並び、賑わっている。
- ③ 悪ガキと警備の下級藩士
打ち上がったおもちゃに我慢できず走り出す悪ガキたち。その素早さに警備が追いつかない…。
- ④ 飛び込み
水面へ一斉ダイブ。
※大変危険です。
- ⑤ 瓜まきと曲泳
藩士たちによる全力のウケ狙いが垣間見える貴重な場面である。

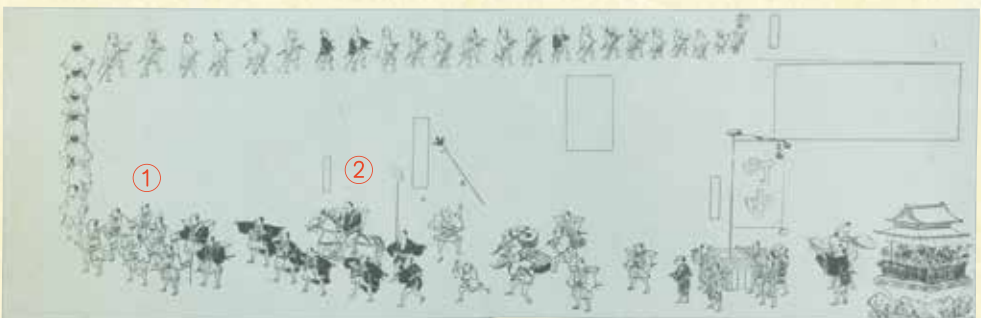
8〜11、東照宮祭礼之図

待ちに待ったお祭りの日、仙台は大賑わい！

【解説】

仙台の東照宮は承応三年（一六五四）に二代藩主伊達忠宗によって創建され、同時に東照宮の別当寺である仙岳院や門前町の宮町が造営された。そして「仙台祭」とも称された東照宮祭礼は九月十七日に開催されていた。祭礼で城下を練り歩く行列は、藩士による先陣・町人による山車行列、東照宮による神輿行列・仙岳院による供奉行列・藩士による後陣という順序であった。

特に「渡し物」と呼ばれた山車は藩の命令により城下の商人に出させたもので、各町ではその豪華さを競い合った。本図の解説において三原良吉が「京の祇園祭、江戸の神田祭に比して劣らず」と表現した東照宮祭礼、その様子は絵図からも生き生きと伝わってくる。なお本図は嘉永三年（一八五〇）時の祭礼行列を描いたものと考えられる。



東照宮祭礼之図 其一

俺たちのパフォーマンスを
とくとご覧あれ
（足軽たちの晴れ舞台）

【絵引き】

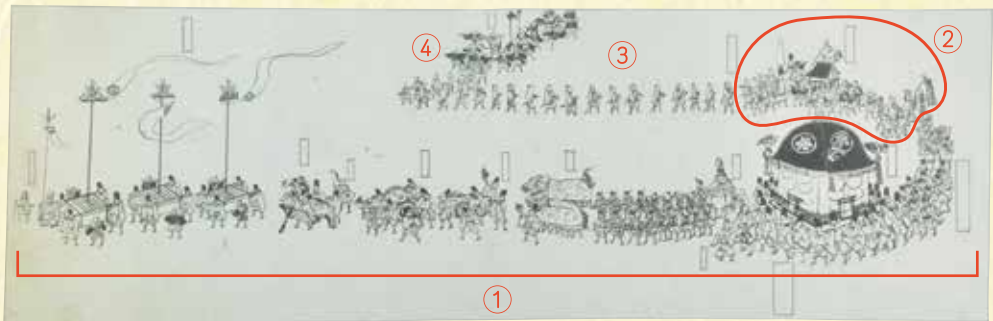
- ① 藩士による先陣
行列の先頭を飾る。足軽組のうちローテーションで選ばれた二組の中から、くじで決められる。先陣を勤めることは大変名誉なことであった。
- ② 先陣の武頭
武頭は若年寄支配下の役職で、足軽組を統率する。祭礼行列の際は騎乗している。

東照宮祭礼之図 其二

渡し物大集合！
（日本武尊も坂上田村麻呂も坂田金時も）

【絵引き】

- ① 磯良庵庵宮城におゐて千珠満珠を得給ふ体
海に入れると潮が満ちるといふ満珠と、反対に海に入れると潮を引かせるという千珠。この二つは竜宮城の宝物だという。
- ② 牛若丸鬼一法眼に見る体
鬼一法眼は京の一条堀川に住む陰陽師。彼が持っていた兵法書を牛若丸（源義経）に盗まれる。
- ③ 坂上田村麻呂、鈴鹿山出陣の体
坂上田村麻呂、武装を整えていざ出陣！
- ④ 坂田金時追儺の体
逃げ惑う鬼を懲らしめるのは坂田金時。
- ⑤ 六孫王経基源氏の姓を賜り白幡宝剣を給ふ体
清和天皇の孫で、清和源氏の祖とされる。生没年がはっきりしないなど、謎が多い人物である。
- ⑥ 日本武尊伊吹山にて大蛇を跳越へ給ふ体
伊吹山は現在の滋賀県にある。ヤマトタケルは伊吹山の神の化身である大蛇をまたいで進んだことをきっかけとして、その後命を落とす。



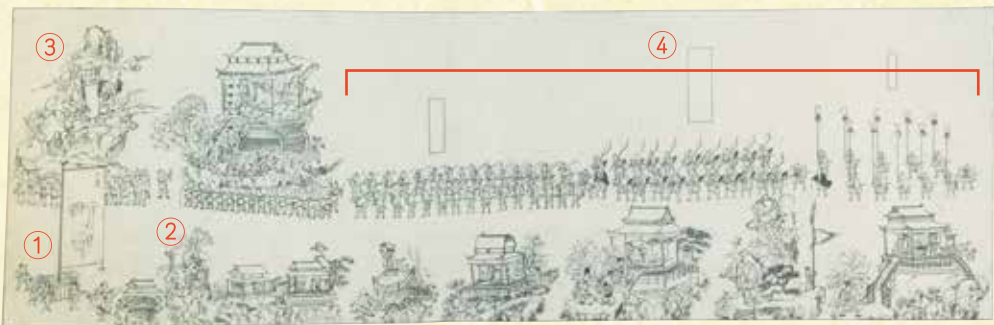
東照宮祭礼之図 其四

行列はラストスパート
 ～神馬がいなき、
 鉦鼓を鳴らし、神輿が進む～

【絵引き】

- ① 東照宮による神輿行列
 其三④の続き。太鼓や鉦鼓を鳴らしながら進み、最後尾に神輿が続いていく。
- ② 仙岳院による供奉行列
 仙岳院は東照宮の列当寺で、神輿行列の後ろに続く。
- ③ 藩士による後陣
 行列の最後をかざる。藩士たちの堂々たる行列を見よ！
- ④ 後陣の武頭
 先陣の武頭と同じく、行列のときは馬に乗っている。麻上下を着た立派なでたち。

担当…石澤夏巳



東照宮祭礼之図 其三

まだまだ続くよ渡し物
 ～豪華な行列は見る者を
 物語の世界へいざなう～

【絵引き】

- ① 町印小旗
 「三番」と書かれている。其三で描かれている渡し物は、一番から三番までであった渡し物を出す町中のグループのうち、三番の町人が出したもの。
- ② 狂言仕掛五穀豊穰神酒を捧る体
 男人形二体と、桜・車・鶏・石灯籠で作成。今年も豊作だといね。
- ③ 四天王大江山入の体
 下の渡し物と比べると、その大きさが一目瞭然！これ、なんと四十人で運んでいます。
- ④ 東照宮による神輿行列
 上の絵では、鉄砲・弓・槍を持った行列が描かれる。

藩校養賢堂と医学館で学ぶ子弟たちの様子をのぞいてみよう！



【解説】

図の右側は、仙台藩の藩校養賢堂からの下校風景を描いたものとされる。役人に対して石を投げたり、ふん尿を運ぶ農民がひく馬を驚かせ、馬が暴れるさまを見て笑っているなど素行の悪さがみえるが、養賢堂で学ぶ藩士の子弟たちは日々勉学に励んでいた。また軍学や剣術・槍術・弓術・馬術も教科として教えられており、その稽古が武芸道場や馬術道場で行われた。

図の左上には、養賢堂より独立した医学館が描かれる。校内には貧民を治療したり臨床実習が行われる施薬院や、日本で最初の公共図書館とされる青柳館文庫が設けられた。ここで学んだ藩士の子弟たちが、仙台藩の未来を担う侍に育っていくのである。

【絵引き】

- ① やんちゃな子弟たち その一
藩の役人に石を投げつける連中。これには役人も呆れている。
- ② やんちゃな子弟たち その二
肥料に使う、ふん尿を運ぶ馬を驚かせる連中。暴れて走り去る馬と、それに大慌ての農民。
- ③ やんちゃな子弟たち その三
犬のケンカに寄り集まって、それを煽る連中。ちなみに彼らがいるのは養賢堂の裏門で、右側には火の見櫓がみえる。
- ④ 医学館に通う子弟たち
頑張って勉強して、立派なお医者さんになってね。
- ⑤ 武芸に励む子弟たち
剣術・槍術・馬術の稽古中。熱気がここまで伝わってきそう！

仙台領高名競角力見立

寸法
四五〇×三四〇(センチメートル)

【解説】

本資料は常磐雄五郎が『仙台中行事絵巻』を復刻する際に付録として取り上げたものであり、文政十二年(一八二九)に刊行された。

江戸時代にはさまざまな名所や特産品、有名人などを番付の形式で格付けしており、本資料でも仙台藩領内の名物を番付で紹介している。ちなみに「横綱」は明治時代以降に登場する称号であるため、本資料には書かれていない。

番付表の上二段では、仙台藩領内ではるか昔から全国にその名を轟かせるものが書かれており、松島や塩竈がその筆頭に挙がっている。江戸時代後期に何が名物として認知されていったのかを知るうえで、おもしろい資料である。

【ここに注目!】

①平泉
奥州藤原氏の本拠地のあった地である。現在は岩手県に属しているが、江戸時代は平泉も仙台藩領であったため、藤原秀衡や中尊寺などとともに番付に取り上げられている。

②オオズ虫
仙台藩では城下町東部の宮城野で捕れた鈴虫を、江戸幕府に献上するのが恒例となっていた。

③宮城のしづぶ
「奥州白石噺」として宮城県白石市に伝わる、「宮城野」「信夫」姉妹による仇討ち物語である。この話は浄瑠璃・歌舞伎・錦絵などとして江戸時代に流行し、近代においても二人を祀ったお堂が建てられるなど、大きく取り上げられた。

④国分町
現在の国分町(通称ブンチョウ)。物資輸送を担う伝馬町であり、多くの宿が建てられた。ちなみに近世の国分町は町人町であるため、「ここでの読み方は「こくぶんまち」である。



四十五年七月吉日
發行所 仙臺寺上願丸八
仙臺地五郎藏

郷土史家常盤雄五郎 古書蒐集と郷土研究にささげた生涯

大正から昭和にかけて仙台では郷土史研究が盛り上がり、さまざまな郷土史家たちが活躍した。『仙台中行事絵巻』を復刻し世に送り出した常盤雄五郎（一八八七―一九五六）も、その一人である。ここでは、仙台関係の資料蒐集や歴史研究に一生をささげた常盤の生涯をのぞいてみよう。

夢中になった郷土研究

常盤の郷土への関心は、少年時代に没頭した小切手・古銭蒐集の趣味や、自宅にあった古書などを通じてスタートしている。また考古学にも興味があった常盤は、発掘仲間と仙台考古会を立ち上げている。これがきっかけで、常盤は宮城県立図書館へと就職を果たす。その後上京してしばらく内閣文庫で勤務したが、兄雄太郎の計報を受けて仙台に帰ることとなった。それから戦前にかけて、宮城県立図書館、東北帝国大学附属図書館で資料整理にあたった。その間には郷土史談会を立ち上げ、研究仲間たちと例会や会報の発行を続けた。また『仙台叢書』や『仙台人名大辞書』といった仙台関係の歴史書

の刊行にも携わっている。今回取り上げた『仙台中行事絵巻』を出版したのも、この頃である。

常盤文庫のこと

さて、常盤の生涯を追っていくうえで「常盤文庫」を忘れるわけにはいかない。長年にわたって常盤が蒐集してきた郷土資料は、太平洋戦争前までに約一〇〇〇点余りに及んでいたという。昭和二十一年、常盤は自身が所蔵する膨大な資料を斎藤報恩会に寄贈することにした。仙台空襲を目の当りにした常盤は、蒐集してきた貴重な資料が散逸してしまうことを懸念したのである。常盤の蒐集資料は「常盤文庫」として保存されることとなり、斎藤報恩会の解散後は他の所蔵資料とともに仙台市に寄贈された。

電車二毛負ケズ!?

『仙台中行事絵巻』復刻にかけた常盤の情熱

『仙台中行事絵巻』の復刻

幕末に描かれた『仙台中行事絵巻』は、郷土史家の常盤雄五郎によってよみがえることとなった。常盤はかねがね、自身のコレクションの一部だった『仙台中行事絵巻』を復刻したいと考えていた。そこで常盤は関係者に資金援助を募り、作業を進めることにした。また三原良吉による「仙台中行事絵巻解説」と、補助資料として「仙台中行事大意」（二世十遍舎一九『奥羽』覧道中膝栗毛第四篇巻之下』嘉永二年）、「仙台領高名競角力見立」（文政十二年）を附している。こうして昭和十五年七月、限定二五〇部・金十円で『仙台中行事絵巻』が復刻されたのだ。なおこのタイトルは、復刻の際に附されたものであって原題はない。

常盤、電車と相撲をとる

作業途中に常盤は勾当台通りで路面電車と衝突事故を起こし、大怪我に見舞われた。意識を失って目を覚ましたときには、病院の寝台に横たわっていたという。その後自宅で治療を受け回復に向かったものの校正が次々

と送られてくるため、満身創痍の常盤に代わって三原が作業にあたったという。怪我にもめげなかった常盤の強い思いが、『仙台中行事絵巻』には込められている。

「仙台中行事絵巻解説」の評価

最後に「仙台中行事絵巻解説」に記述された、本資料の特徴や見どころについて紹介しておこう。本資料の最も優れた点は、仙台城下における武士や民衆の生活の様子をありありと描いているところだという。藩主から物乞いに至るまでさまざまな身分の人々、そして城下の名所・祭礼・各家の習俗を生き生きと描いている。このように仙台城下の様子を描く資料としては「唯一無二」であると高く評価している。

江戸時代の仙台を想像してみよう!

今となっては江戸時代の様子をリアルにイメージすることは難しい。しかし『仙台中行事絵巻』に描かれているのは、かつての仙台の町の風景である。活気に満ちた城下の姿に、思いを馳せてみてはどうだろうか。

用語解説

【賢淵】写真①・②（7、藩主狼烟御覽附水練御覽之図）

茶屋町とも呼ばれていた賢淵（かしこぶち）は、仙台市青葉区八幡五丁目にあり、現在もその景観を残している。この賢淵の由来として蜘蛛の伝承がある。淵で魚釣りに興じていた男が、淵の主である蜘蛛に引きずり込まれそうになった。その時、水の中から「かしこい、かしこい」という声が聞こえてきた。それ以降、賢淵と呼ばれるようになったという。茶屋町の人々は蜘蛛を祀り、水難除けの神とし、碑を作った。これもまた現存している。



写真①



写真②

【重臣邸宅の門】写真③

（4、仙台城大手門大橋附近之図）
大手門の外には「門」と呼ばれた重臣の邸宅が並ぶ。「仙台中行事絵巻」では、右から登米伊達家邸と水沢伊達家邸が描かれる。一方慶応元年（一八六五）の絵図では「仙台中行事絵巻」とは反対のアンブルで描かれており、登米伊達家邸の赤門や、水沢伊達家邸の冠木門（かぶきもん）が確認できる。



写真③ 仙台城下図屏風 吉成東温筆 慶応元年 仙台市博物館蔵

【伊達氏の参勤交代】写真④

（4、仙台城大手門大橋附近之図）

参勤交代は、各藩主が一年ごとに江戸に出仕する制度。「仙台中行事絵巻」では輿に乗った藩主とその一行が仙台城に入ろうとする様子を描いたものとされる。仙台藩の参勤行列は「ダテモン」と称される豪華な行列であった。経路はおおむね奥州街道を通り、七泊八日から八泊九日かけて江戸と仙台を往復した。



写真④ 桑山公行列図巻 仙台市博物館蔵

【縁の綱】（5、大回向之図）

縁の綱とは寺の本尊とつながっている綱で、それに触れることで本尊に触れたのと同じ功德があるとされている。「仙台中行事絵巻解説」には、参詣者がこれに触れると、「回向の有無亡者に通ず」と述べられている。実際に触れるのは綱が結ばれている棒の方であり、絵をよく見ると、参詣者たちが棒に手を伸ばしているのがわかる。

【筆塚】写真⑤（6、幟見附天神講之図）

寺子屋の門人（筆子）が師匠の学恩に報い、菩提を弔うために建立したものである。天神講の際に、使い古した筆を奉納する習慣もあったという。筆塚は現在でも榴岡天満宮の境内などにある。



写真⑤

引用・参考文献、HP

大藤修 二〇〇八年『仙台藩の学問と教育―江戸時代における仙台的学都―』大崎八幡宮

菅野正道ほか 二〇一五年『仙台城ポケットガイド』仙台市博物館

菅野正道ほか 二〇一七年『城下町仙台ポケットガイド』仙台市博物館

菊地勝之助 一九九五年『仙台事物起原考』（再編復刻版）ヨークベニマル

齋藤潤ほか 二〇〇一年『仙台城―しる・まち・ひと―』特別展図録 仙台市博物館

佐々久ほか 一九八一年『資料―郷土研究家の聯盟―仙台郷土研究会なる』『仙台郷土研究』復刊第五巻第二号

仙台郷土研究会編 二〇一〇年『仙台藩歴史用語辞典』仙台郷土研究会

仙台市史編さん委員会 二〇一二年『仙台藩歴史事典 改訂版』仙台市史編さん委員会

仙台市史編さん委員会 二〇〇一年『仙台市史 通史編三 近世二』

仙台市史編さん委員会 二〇〇三年『仙台市史 通史編四 近世二』

仙台市史編さん委員会 一九九七年『仙台市史 資料編三 近世二 城下町』

日本伝承大鑑 <https://japanmystry.com/>

高橋充ほか 二〇〇一年『武者たちが通る―行列絵図の世界―』福島県立博物館

常盤雄五郎 一九九一年『本食い 歳五拾年（復刻版）』今野印刷株式会社

沼田愛 二〇一三年『田植踊のイメージの再検討―江戸時代中期から後期における仙台藩を事例に―』民族芸能研究 第五五号

政岡伸洋 二〇一〇年『仙台の祭りを考えるための視点と方法―民俗学の立場から―』大崎八幡宮

三原良吉 一九四〇年『仙台中行事絵巻解説』仙台廿話会

三原良吉 一九八二年『郷土史仙台耳ぶくろ』宝文堂

波邊洋一 二〇一六年『仙台藩の参勤交代―仙台から江戸へ三六〇キロ―』歴研「江戸文化」ブックレット



KOREMITE vol.5

編集・発行 東北学院大学博物館

発行日 2019年8月30日

〒980-8511

宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1

TEL : 022-264-6920

<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/facilities/museum/>



@tgu_museum